

# 東京大学 総合図書館 準漢籍目録

山本 仁編「東京大学総合図書館漢籍目録」に続く待望の続編。本目録は一五〇〇点にも及ぶ準漢籍を整理分類し、書誌的解説と請求番号を示したものである。本編と附録の二部から成り、本編は準漢籍を附録には準漢籍に準ずる図書を収録。幅広い分野に不可欠の資料。定価二二六〇〇円

## 浮世絵大事典

国際浮世絵学会編 最新の研究成果を盛り込み幅広く収録して解説。浮世絵の膨大な情報を一冊に簡便にまとめた初の大事典である。重版出来定価二九四〇〇円

## ROM版くずし字解読用例辞典

山田奨治・柴山 守編 ロングセライのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト発売◆詳細内容見本進呈◆価格二九四〇〇円

## 東京の消えた地名辞典

竹内 誠編 東京二十三区内の地名一〇〇〇についてその由来、形成過程、地形、変遷などを解説。記憶の中にある消えた地名が今よみがえる。定価二七三〇〇円

## 地図から消えた地名

今尾恵介著 歴史のある地名が町村制施行や合併などで消滅した。本書では約二〇〇の消えた地名の由来と消えるまでの経緯を詳細に解説した。定価一八九〇円

東京堂出版 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17  
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746 <http://www.tokyodoshuppan.com> (価格は税込)

2月刊行 全国に散在する浄瑠璃本二万点を徹底調査、世界無形遺産・人形浄瑠璃文楽の上演実態を解明

## 浄瑠璃本史研究

—近松・義太夫から昭和の文楽まで—  
神津武男 著 A5判 70頁 予定定価一八九〇〇円

全国に所在する義太夫節正本約2万点を渉猟・調査し新聞報道された「曾根崎心中」初刷本の図版全丁を収録する他、浄瑠璃本の分類、興行と板元・正本刊行日の関係や、作品の歴史の変遷を解明。さらに全国2万点の正本の所在や外題の読み方などの詳細な一覧表を収録。明快・平易な論述スタイルで、誰にも読み易い研究書。

後鳥羽院を特集に諸論考を収録!

## 明月記研究 第10号

明月記研究会編 B5判 188頁 定価三、一五〇円

後鳥羽院と恋歌

後鳥羽院と元久元年十一月十日「春日社歌合」

建暦期の後鳥羽院政

承久の乱における三浦義村 他

実質の日記を読み解く初の注釈書!

## 小右記註釈 長元四年 (二〇三二)

黒板伸夫監修・三橋正編 A5判 150頁 二五、二〇〇円

古記録を読解するのに格好の指南書!

定価一六〇〇円 本体一五二四円

八木書店 出版部  
【呈詳細内容見本】 \*定価は本体+税5%の総額表示です。  
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8 K係迄  
03-3291-2961 (FAX-6300) <http://www.books-yagi.co.jp>

# 国文学 3

## 特集 流人の文学

国文学 解釈と教材の研究

平成二十一年三月十日発行 毎月一回十日発行 第十四巻第四号三月号  
昭和三十一年九月二十五日 第三種郵便物認可 (通巻七八二号)

第五四巻四号 二〇〇九年三月号

# 国文学

日本語・日本文学・日本文化

二〇〇九年 第五四巻四号  
解釈と教材の研究

特集

# 流人の文学

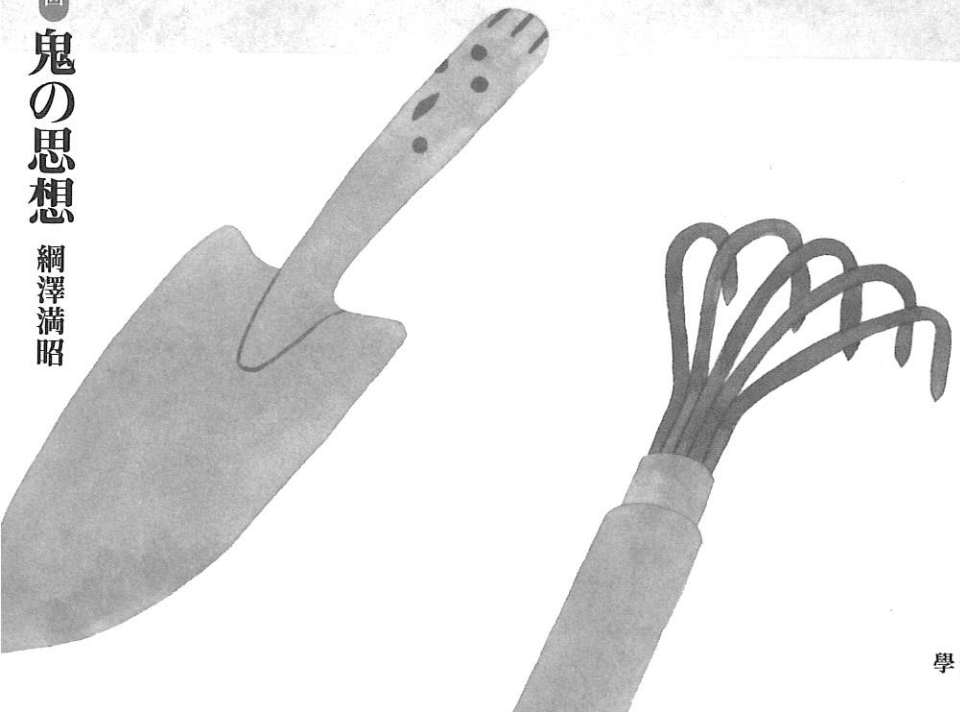
「貴種流離譚」とは何か 山岡敬和

シマと島の下ポス 菅田正昭

流人と呼ばれた人たち

世阿弥／小野篁／後鳥羽院／役の行者  
伴大納言／日蓮／親鸞／若宮丸漂流民

最終回 鬼の思想 綱澤満昭



学燈社

ISSN 0452-3016  
雑誌 03787-3



4910037870391  
01524

Printed in Japan

# 心意伝承

—遊働世界に生きる—

ほんじょうまさかず  
本莊雅一

## 第十八回 尽生成死譚① 闇にぬらめく

いのちのよびのよびに輝くのか

赤ん坊のうんちがついた布おむつを、水洗便所の便器の中でごしごし洗う。

日焼け止めローションをクリーミーにしたような香りが広がり、便器の水がきれいな黄土色にそまる。バイオリン製作の無鑑査マスターメーカー陳昌鉉が、ニスに乳児のうんちを混ぜてみた(『海峽を渡るバイオリン』三〇一頁)というのも素直にうなずけるほど美しい、いのちの色だ。

でもまさか自分がこんな作業をするとは、それまでは想像もしなかった。最初の子が生まれた時に、手伝いに来てくれた母が素手でしているのを見て妙に感動し、意を決して真似てみたのだ。やってみてしまえば意外にど

うということもなく、むしろ便器と水とうんちに戯れて、自分の手と気持ち洗われてゆくのを感じられた。爾来赤ん坊のうんち洗いは私の趣味となった。

ただこうしていると、ときどき思い出すことがある。学生時代に、キャンパス内の清掃をさせられた時のこと。ベンチわきのくずかごの中身の、大きなポリ袋を抜き取っては焼却炉に運び込んだ。その中の一つに、すでに干からびた黒のポリ袋で、表面に枯れ葉ばかりが見えているものがあつた。口を結んで運ぼうとしたら、やたらと重い。異様に重い、重すぎる。本当に中身も枯れ葉なのだろうか。

焼却炉の十歩手前で、とうとう破けた。風船のように全体が破裂し中身が一気に吐き出された。紅白混合物の散乱。枯れ葉ではなかった。

最初、鼻血の付いたティッシュユカと思つた。が、幸いそうではなかった。

いや幸いとも言えない。よく見たら、血まみれの白いスポンジだった。初めて見るが、確信した。女性の経血をたっぷり含んだ、生理用ナプキンにちがいはあるまい。そんなのが何百だか何千だかわからないが、気が遠くなるほどおびただしく散乱している。

なんで屋外のくずかごにこんなに大量に捨てられていたのか、といった当然の問いは、その時は思い浮かばなかった。近くに誰もいず、竹箒も箕もなく、予備の袋も手袋もない。つまり今からひとり、しかも素手ですべてのそれを、焼却炉に放り込まなければならぬ。その敵然たる事実を前に、しばし悄然と立ち竦んだ。

とばかりもしていられない。おもむろに作業に取りかかる。不思議なほど何の感興もわかず、始めた時の戦慄感もすぐになくなり、ひたすら使用済みナプキンを両腕でかかえて、焼却炉と「事故現場」とを往復した。

ようやく終わる頃になって、仲間に見つかり、事情を説明した。すると、「おまえはそういう奴だったのか!」と、さも汚らわしいものを蔑すむように言われた。なぜだ、おれの方が被害者のはずだ。理不尽じゃない

か。

そう思いつつも、なぜだか言い返せなかった。

「おまえはそういう奴か」と言われれば、確かに、そういう変な目にあうような奴と言えるかもしれない。あの作業をしている最中に、鼻血やけがをした時の血とは違つて、経血というものは時間がたつても鮮やかできれいな色をしているなあと、妙に感心したりもしていた。

生命の源の赤だ。特別なものかもしれない。歴史学の教授も、「日の丸とは女の赤い血に男の白い血が混ざりあう瞬間の図だ、だから美しい」と、ある日の講義で言っていた。なるほど、うまいことを言うものだと、その時も素直に感動したのだった。

脈絡ありとも思えないが、うんち洗いをしていると、ときどきこのことも思い出すのである。だから、無意識層での脈絡はあるのだろうか。いったいどんな脈なのだろう。

血、乳、霊、地、みち、もち、いのち、うんち、おどろち、ちから……。 「ち」は超越的な威力であり、おどろおどろしくも汚らわしくもあり、甘美で懐かしくもあり、実利に効ありかつ精神性に昇華もする。いずれにせよ「俗」を別次元に塗り替えてしまう「聖」性を發揮す

るものである。うっとり味わうべきものと言える。そうだ、うんちも血も、汚いとか大事とかこわいとか、表現は異なるが、生命の象徴としてはかなり先鋭的な感興をもよおすものと言つてよい。日常卑近のものながら、神話的な秘義・本質を蓄える。そういつたもののかかわりから、私たちの生命は何か深い次元に感電し、反応しながら活動しているのである。

いったい、いのちとはどのように輝くのか。

素朴な問いだが、究極の問いでもあろう。到底、結論が出るはずのものでもないが、本連載の最終章として、この泥沼にはまり込んでみようと思う。

### 闇に垣間見えるモノこそ本質的

私は子どもの頃から日陰者よろしく教室の隅でひっそり息を殺して棲息し、「輝く」などということには全く縁がなかった。

ところが高校時代の古文教科書で、「徒然草」の第三十七段「花は盛りに 月は隈なきをのみ見るものかは (桜の花は、満開の時ばかりが見ごろではない。月は陰りのない満月ばかりを味わうべきではない)」のくだり

に触れ、通常見放されているものの味わいが、文化的評価を受けうることを知った。新鮮な驚きだった。

闇の美しさ、欠けていることの味わい、けがれの聖性、物騒さの生命力……

理知の光による「輝き」ばかりが、いのちのあるべき姿ではないと、教えられた。

やがて、「浪人」という、文字通りの日陰者にもなった。学生でもなく働きもせず、受験勉強だけしていることが許され、飯も食わせてもらえない、豚のような身分。いや、牛や豚は自己都合でそんな身分でいるわけではないから、比べるのも失礼か。つまりそれ以下の身分。托鉢僧たちがあえてその境遇に自己を置く意味も、わかる気がした。

この世のあらゆるものに対して一切頭の上がらない、最低の存在である。そうなってみて、さまざまな物事の冷たさ温かさ、美しさ醜さが生々しく体感できた。プラスの面もマイナスの面も、ともに味わうべきものとして見えてきたのだ。大変よい修行になった。

この間に読んだ谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』(中公文庫)にも、教えられることが多かった。特に心打たれた部分を、やや長い引用してみる。

ぞつとすることはすなわち色気を感じていることなのだ。闇のぬらめきに魂と皮膚とが同時に慄えるのである。明るく華やかな世界の輝きだけでなく、暗い闇の煌きにも生命力の本質を見出す。

千利休が、茶の湯の本意「わび」の心を叙すものとして愛唱した歌に、「花をのみ 待つらん人に 山里の雪間の草の 春を見せばや (藤原家隆)」がある(岡倉覚三『茶の本』岩波文庫 八四頁)。この場合は、「白い闇」の中でたまさかに、幽かに見える若緑の煌きこそが、春そのものだといふのである。

身近な小学生の女兒が詠んだというか、編集した「俳句」に驚かされたこともある。

いのち短し 恋せよ花火

言うまでもなく、森繁久彌の名曲「ゴンドラの歌」(吉井勇作詞、中山晋平作曲)の「いのち短し恋せよ乙女」の本歌取りである。だが、もとの名曲を超えた映像ではないかと思う。

花のいのち短い乙女に恋をすすめるといふのは、それこそありふれている。

しかし、この替え歌の場合、おそらくは線香花火のよ

われくの先祖は、明るい大地の上下四方を仕切つてまず陰翳の世界を作り、その闇の奥に女人を籠らせて、それをこの世で一番色の白い人間と思ひ込んでいたのである。(中略)昔の女が眉毛を剃り落したのも、やはり顔を際立たせる手段ではなかったのか。そして私が何よりも感心するのは、あの玉虫色に光る青い口紅である。もう今日では祇園の藝妓などでさえ殆どあれを使わなくなつたが、あの紅こそはほのぐらい蠟燭のはためきを想像しなければ、その魅力を解し得ない。古人は女の赤い唇をわざと青黒く塗りつぶして、それに螺鈿を鏤めたのだ。豊艶な顔から一切の血の気を奪つたのだ。私は、蘭燈のゆらめく蔭で若い女があつたの鬼火のような青い唇の間からときどき、黒漆色の歯を光らせてほく笑んでいるさまを思うと、それ以上の白い顔を考へることが出来ない。少なくとも私が脳裡に描く幻影の世界では、どんな白人の女の白さよりも白い。白人の白さは、透明な、分かり切つた、有りふれた白さだが、それは一種人間離れのした白さだ。

(四三—四四頁 ルビ筆者)

うな、ふるえつつ、か細く可憐に咲く闇の花が、その一瞬の存在証明として身を焦がすさまを、遠慮がちな恋とひとつに連想した。しかもそれが小学生だったことに、私は日本人の生命燃焼法の、抗いがたい心意伝承を見た思いがしたのである。夜空に瞬く星屑と、無明の闇をちりりと焦がす恋心とが、日本人にとっての生命存在の基本であったと言え、言いすぎであろうか。

「雪間草」と同様、ちらと垣間見えるものにこそ、本質が兆候するのである。

## 生と死のコンステレーション

日航ジャンボ機の御巢鷹山（正確には高天原山）墜落事故（一九八五年）の時に、生存者が救出されたあとではあったが、フリーカメラマン志望の友人が現場に入つて一晩を過ごし、下山後に漏らした一言も忘れられない。

「闇を満たす屍の中で、ひとり、慄える心は、美しい」と彼は言った。遺体や遺体の一部、遺品たちがおびただしく散乱し、臭気もひどく、自衛隊に支給された毛布をかぶるだけではとても耐えられるものではなかったとい

縮、というふうには見ていないのである。

極論すると、私たちは死そのものも、必ずしも忌避しているとはかり言えない気がする。死を美化するというのではない。美化とか正當化とかの、何らかの転化ではなく、もっと素朴な相を見つめ直してみるべきと思う。

私たちは生の尊厳を認めるようにして、どこかで死の尊厳を確保しようとしているのではないだろうか。

## 風景の解体は死をも奪うこと

社会学者見田宗介の文章に、次のような印象的な一節があった。

アメリカの原住民のある部族の長老は、白人の征服者たちについて、自分は彼らが、部族の食物も財産も奪っていったことも許そう。妻や子や友人たちを殺したこともさへも許そう。しかし彼らが、桃の木を切り倒してしまったことだけはどうしても許せないと言ったことがあります。近代人の目には、事の大小をさかだちした価値観のようにみえるかも知れないけれども、この長老が言っているのは、自

う。眠れずに、闇夜に瞬く星を見つめながら、生き残った四人が救出されるまでの、かれらの思いの残像を追跡してしまつて、気がつくとそのなふうにとどり着いてしまった感慨だと言った。

事故は盛夏のことであり、腐敗の進行は速く、夜は寒い。つまり、耐えがたいのにひたすら耐える、否、耐えるといった抵抗をあきらめて、その場のものもろに晒されるしかない。

そうした、生死や好悪のこだわりをあきらめて、その時の宇宙に晒され、その宇宙の意思にまかせざるの姿は、美しいとしか形容のしようがなかったのだらう。

なぜだか私たちはどうしても、いのちの究極的な輝きを、こんなふうにして死との共時的配置に見出してしまふ。

因果論ではないのである。

死亡原因があつて、死に至つたり、その直前に燃え盛つたり、ということが、本来的な生命燃焼ではない。事実はその順序であつたとしても、である。私たちが本当に生きた実感をもつたり、他者の生き方に感銘を受けたりする時には、たとえその直後に死に至つた場合でも、死への原因と結果を埋め合わせるだけの生命の膨張と収

分たちが、いつかはそこに帰ってゆくことのできる世界のたたずまい、風景を解体することで、白人は原住民の生を奪つただけでなく、死をも奪つたのだということ、このことでまたその生を、根本から虚しいものに変えてしまったということであると思えます。（一九九〇年七月二六日付朝日新聞「豊かな老いへ」より）

生と死とを因果律ではつきり区別するのではなく、生・死ともに存在尊厳の諸風景として、共時風景として、とらえている。逆に言えば、風景の破壊は、生死両相を破壊することとなる。

見田の危惧する「風景の解体」とは、なにも自然豊かな景観のことばかりではあるまい。家族そろつての食卓。地域内での日常の道徳（あいさつ、協力、叱責など）。モノを作る・直す・ふるまう・けちるなど、要するに念入りな扱いをする。儲けるのはあくまでも社会貢献の手段として。つまり私利私欲の蔑視。「卑怯」と言われることが最も我慢ならないということ。などなど。こうした「風景」のことごとくがいまや灰燼に帰して久しい。

征服者によらずとも、大人たちが実は子どもたちの風景を次々と破壊していることの恐ろしさを思うべきであろう。そうした中で、存在の尊厳感覚のマヒした者が育ち、まるでおもちゃをもてあそんだり壊したりするようにして、小さな命をもてあそび、壊す者も出現した。

殺された子どもたちは、生を奪われたばかりではなく、彼ら本来の死をも、奪われたのである。

さらに言うと、私たちもその生死奪い合いの構成員にすぎないという恐るべき事実を、私たちは歯を食いしばって認識すべきではないか。「私利私欲蔑視」の風景など懐かしくもない、何を時代錯誤な、と、考えているからだ。「卑怯」なんて死語に何でムキになる必要がある、と冷めきっているからである。それが殺伐の風景を子どもにも青年にも押しつけていることを、自覚すべきだろう。

### 魔星(マジョリ)て世を驚かす

ではいかなるコンステレーションに、私たちは「生死の充実」を見出すのだろうか。素直に心が吸引される世界とはどの様なものか。広い意味での「庶民文学」に注

目してみよう。

高度経済成長の安定期である一九七〇年代から八〇年代にかけて、「水滸伝」のような、多くの「魔星」が飛散し、超人と生まれ挙りてこの世を驚かす、そんなモチーフをもつドラマやアニメや漫画が集中的に流行した。

日本の劇的な戦後復興が実現した状況の、神話的表徴である。星座 (constellation) をこの世に写し取り、新たな星 (コンステレーション) の現出が、世界変動を起こすストーリー構成と言える。

たとえば人形劇『新八犬伝』、柴田錬三郎原作、本宮ひろ志画『真田十勇士』、漫画『アストロ球団』など。

滝沢馬琴 (一七六七―一八四八) 作『南総里見八犬伝』 (二一四四年) は室町後期の関東地方が舞台。安房国里見家の伏姫と、忠犬八房との疑似婚に乗じた怨霊からの感精によって、伏姫は八人の若者 (八犬士) の魂を宿す。生身の八犬士は関八州の各地で生まれた。苗字に「犬」を含む彼らは、それぞれ仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の文字のある水晶玉を持ち、牡丹の形の痣を身体どこかに持つ。長じてさまざまな修行を経、宿縁をもつて、里見家に集結する。

この物語を子ども向けにアレンジし、同じ滝沢馬琴の

「椿説弓張月」の設定もまじえたNHK人形劇が『新八犬伝』 (一九七三年) である。

遠崎史朗原作・中島徳博漫画の『アストロ球団』 (一九七三年)。不世出の名投手沢村栄治が戦死する前に見た夢を実現すべく、フィリピン人実業家のシュウロが来日して、九人の野球超人を探し出す (漫画では沢村がレイテ島戦で玉砕したことになっている。シュウロは沢村にかわいがられていた地元少年)。昭和二九年九月九日午後九時九分九秒、九つの発光球体が夜空に飛び散り、体のどこかにボール形の痣をもった男児が誕生した。それから十九年後の昭和四八年にその九名が集結し、新生球団を結成すると、沢村は予言していたのであった。

柴田錬三郎原作・本宮ひろ志画の漫画『真田十勇士』 (一九七五年) では、青年期の真田幸村が浅間山頂上にて天竺波羅門僧魔比達から「おまえは滅びゆく者に栄光を与える」武將だとの啓示を受ける。その時に火口から噴き出した十個の鉄塊で十振りの剣を作り、十勇士の集結を待つ。

一九八四年に始まった『DRAGON BALL』 (鳥山明) は、世界的なヒット作品となり、一作家の仕事という枠を超えていくつもの企業や国・地域へ、物語世界のイメ

ージと作品関連ビジネスとを供給し、一大産業として拡大するという、前代未聞の現象を引き起こした。

七つの星が刻印されたボールを集めると「神龍」が現われ、一つだけ願いがかなえられる。たんに「祖父」の形見としてドラゴンボールの一つを持っていた「孫悟空」少年が、この魔力を悪用しようとする者たちと戦ううちに、際限なく強力な戦士へと成長・変貌してゆく。この際限のなさが、グローバリズムの持つ志向性とマッチしていた。

これらの物語のどれもが、死霊・怨霊や滅びを重要な契機として成り立つ。『アストロ球団』など、野球の試合中に死人が出るのに、中斷もせずに決着がつくまで戦うという展開だ。それをまた不思議とも思わず熱くなつてむさぼり読んだ記憶がある。

バブル経済の頃には、このような、異界の意思が現世を激動させる筋のものは下火となったが、バブルがはじけてから再び、呪具呪物の霊力発動によって、危機的狀況に立ち向かう筋の物語が息を吹き返す。野村萬斎主演の映画「陰陽師」 (二〇〇一年滝田洋二郎監督) などが典型例である。

二〇〇四年スタートの漫画「にらぎ鬼王丸」 (荒仁原



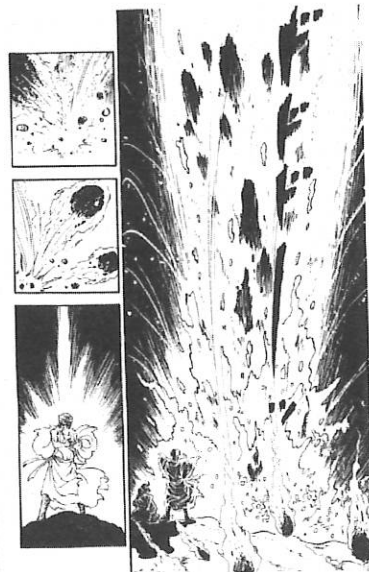
鳥山明「DRAGON BALL」(1巻) P.22  
集英社ジャンプコミックス、1985



原作/遠崎史朗 漫画/中島徳博  
「アストロ球団」(1巻) P.43  
集英社ジャンプコミックス、1973



原作/柴田鎌三郎 画/本宮ひろ志「真田十勇士」(1巻) P.14-15  
集英社ジャンプスーパーエース、1988



原作/荒 仁 漫画/坂本眞一「にらぎ鬼王丸」(1巻) P.193 (右)、P.120 (左)  
集英社ヤングジャンプ・コミックス、2004



作・坂本眞一(画)は、こうした伝奇伝承の、なるべく古い形を追求していて興味深かった。刀工として修業中の青年鬼王丸。一八年前に裏山に落ちた「星の鉄(隕鉄)」とともに捨てられており、月山鍛冶・貞光に拾われた。「星の鉄」は天空で七つに分かれたと、伝承されている。添えられていた物品から、特殊な製鉄民の末裔と目される鬼王丸は、長じて、すべての「星の鉄」を集め、流星刀を打ち上げるべく、旅に出る。

この「鬼王丸」が、それまでの同じ系譜の物語モチーフを集約しつつ、実際の神話とも直結しているのではないかと、そう思わせられた。

モノ作りに、神の出現・蠢動と同じ印象を、私たちは抱くのである。

## 「神剣」小考

人類の鉄使用は隕鉄からとはよく言われる。考古学者関廣尚世は、「隕鉄使用は前四〇〇〇年紀から始まり、前二〇〇〇年紀まで装飾品や装身具として用いられる傾向にある」(「古代エジプトにおける初期鉄器」『考古学研究』第五二巻第二号二〇〇五年)と指摘している。

装飾品としては問題ないのだが、隕鉄にはニッケルやリン、硫黄などの不純物が多く、溶融寸前まで高温にしなければ鍛造しにくいものであるから、超古代において隕鉄からの武器製造は容易なことではなかった。

国立歴史民俗博物館の田口勇による隕鉄製鉄器の試作によれば、使用する隕鉄の成分構成にもよるが、最低でも一〇〇〇℃は必要とするようである(「隕鉄製鉄器の自然科学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告第三五集』一九九一年)。やはり高温を確保する製鉄炉がなければ隕鉄の鍛造は難しい。

しかしたとえば、古代エジプト神話でホルス神が用いた武器は隕鉄製で、セト神との戦闘で引き起こされた隕鉄の爆発が、雷や流星である、という伝承が存在するらしい(関廣前掲論文)。現実には作れなくとも、「隕鉄製

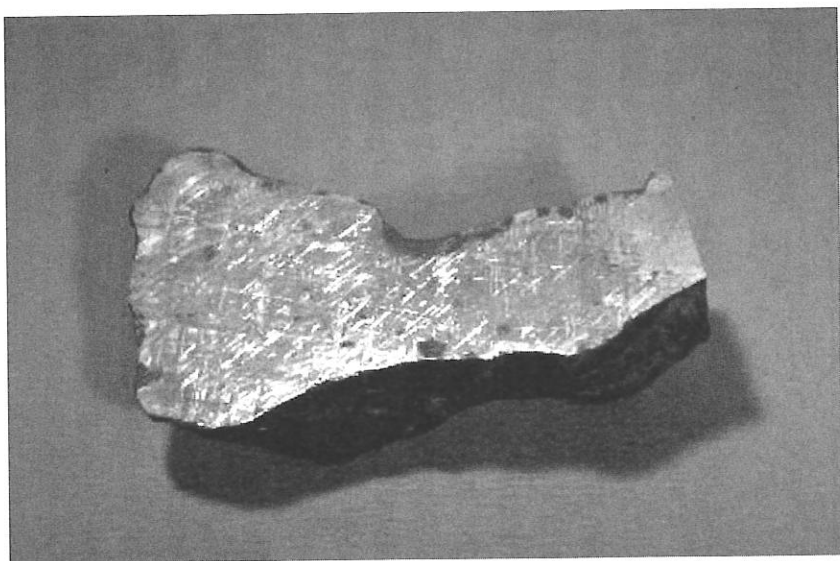
の武器」にこそ大きな威力が備わるという心意は、根強くあつたに違いない。

日本に現存する隕鉄製の刀(流星刀)は、一八九〇(明治二三)年、富山県で発見された白萩隕鉄を、時の農商務大臣榎本武揚が買い取り、大臣辞任後の一八九八年、刀工岡吉國宗に依頼して五振り(長刀二、短刀三)作刀させたものが有名である。長刀一振り、短刀二振り(のちの大正天皇)に献上。今は長刀一振り、短刀二振りが現存している(田口前掲論文)。

この時も、通常の作刀時のように赤熱状態(低温)で折り返し鍛錬するのではなく、白熱(千度以上の高温)するまで加熱して鍛造した。なのでやはり古代における流星刀の実現は困難である。

ところがよく考えてみれば、日本においても、天から降臨する剣が神剣として靈威をふるう伝承は少なくない。やはり「隕鉄製の靈剣」を意識しているとは言えないか。

たとえばヤマタノオロチのしっぽから出てくる天叢雲(あめのむすぶ)剣とは天上世界との縁を名に負っている。スサノオがこの剣を持って天上界へ飛ぶ話が付随するのも、隕鉄のイメージとの融合を表すかもしれない。



流星刀(上)と白萩隕鉄2号(下)  
(流星刀実物は榎本武揚購入の白萩隕鉄1号より作刀)  
画像提供:富山市科学博物館

神武紀即位前紀 戊午年六月条。東征軍が熊野で難渋している時にタケミカヅチ神が神劍「劔靈」をおろす。古事記では「サジフツノ神」または「ミカフツノ神」ともいい、石上神宮に鎮座すると記される。岩波古典文学大系の『古事記』『日本書紀』の頭注によれば、「劔」は物を断ち切る音で、「ミカ」はタケミカヅチと同じく雷を表す。天蓋を断ち割り、雷電を発するイメージで語られているわけである。これが隕鉄の天降るイメージの神格化でなくてなんであろう。

ついでに連想をはたらかせておくと、葦原中国平定に派遣された天若日子が与えられた天之波波矢（天之久矢）なども、天地を往来する矢（鏃）として語られる。死んだ若日子の葬儀に現われ、飛び去りをするアジスキタカヒコ神が所持する大刀にも「大量」とか「神度劍」といった名がついて、靈格を伴わせている。こうしてみると、すべて隕鉄製の神器を象徴させていたのではないかと思えてしまうのである。

神劍「劔靈」を石上神宮で管理する物部氏が祖神として仰ぐニギハヤヒ神は、いわゆる天孫降臨神話以前にすでに幾内に天下りしていた神として、記紀に登場する。この神名が『先代旧事本紀』では「天照國照彦

敏感に追求することで、宇宙と生々しくつながっていようとしたのではないか。

神靈として敬い信仰する対象を、抽象的・形而上的・観念的、要するに人間中心の思弁の世界によるのではなく、肉体を媒介して知りたかった。宇宙全体を、視覚・聴覚はもちろん、触覚や嗅覚、味覚によっても知りたかった。それは、身近なものに感覚を開き、その在り方を追求することでもかなり達せられることにも、次第に気づいただろう。

近代科学と同等の知も発達したのではないだろうか。大海原を縦横無尽にめぐる海民たちならば、つまり北半球と南半球とで北極星の高低や有無が生じる中で生きていた人々ならば、ごく自然にこの世が球体であることを知っていたに違いない。隕石や隕鉄のような宇宙からの贈り物が、この世の岩石とよく似ていることから、月やその他の天体もまたこの世と似た成分でできており、総じて球体であるとも推測しただろう。

海の上から陸地を探すには、陽光や月光に反射する岩石の大きさや形が頼りになるので、月のような天体の満ち欠けの仕組みも見当をつけたはずだ。

仮に天空から飛来したものでなくても、類推や感覚

天火明櫛玉饒速日尊」とある。つまり「天地を照らす靈威ある火球」がニギハヤヒノミコトであると、明確に記述しているのである。

ここまで写実的で説明的な神名を付してあるのに、なぜ隕石・隕鉄の可能性すら誰も指摘しないのだろう。少なくともそうした議論が管見に入らない。かねてより疑問だった。

もちろん隕鉄は安定供給される資源ではないから、神話で語られる神剣もしくは剣のような物体が残存していたとしても、実際に隕鉄製とは限るまい。技術的にも、使える。隕鉄刀の作刀は厳しい。しかし、どうすれば作れるか、の、理屈は分かっていたかもしれない。

いかなれば、非実用で、しかも本当の隕鉄製ですらないかもれないが、それでも「天地を照らす靈威ある火球」がこの世で神格を得て靈宝と顕れる心意は働いていた。その心意を伝承することに、意義があったのではないだろうか。

### 生死一如という神域

思うに古代人は、物の用が織りなす利・益・機・美を磨くことで、この大地において触れられるものに宇宙を見つけ、体感したのではないだろうか。そんな人を先達とか達人とか呼んだのではなかったか。

古代人たちは十分立派な科学者・技術者であり、経営者であり、芸術家であり、信仰生活者であった。各分野が突出的に発達し、ひとりですべてをこなすのが困難な世の中になったから、古代人の人間的統合能力まで信じられなくなったにすぎまい。

「靈威」を感じる感性思考系と、科学的認識の理性思考系との両面を駆使して、森羅万象との具体的交渉を行なう。信仰とはそのための手段であったと思われる。信仰するための意図が明白であれば、つまりどんなイメージを見たか感じたいのかか明白であれば、神体や神宝は作りものであっても差し支えない。ごまかしや偽りが許されないのは、充実した生を営む過程なのである。

たとえば鉄器づくりには、良質で大量の鉄鉱石や砂鉄が欲しい。高熱を発する燃料・材木が欲しい。技術を磨く知恵・ひらめきが欲しい。後継者が欲しい。だから、この産業のシンボル、魅力、靈威を感得させる神が欲しい。その点、隕鉄のような、入手可能な稀少物なら、なお信仰対象として好都合。ただそれだけのことである。



## 由水常雄著 『正倉院の謎』



美術品の見方が変わる  
歴史観が変わる

歴史の闇に隠された正倉院の宝物たちの  
数奇な運命。「正倉院の真実」を解きあかす。

カラー図版50点

A5判 定価3600円(税別)  
発行 魁星出版 発売 學燈社

お問い合わせは  
〒169-8608 東京都新宿区西早稲田3-5-10  
03(5228)7154 <http://www.gakutousya.co.jp/>

実物であってもなくてもどちらでもよいし、そんなことはどうでもよい。大事なものは、この宇宙にありとしあるものと自分たちはかかわり、生かされていることへの、森厳な実感である。

神人交感する聖なる「遊び」がそのまま「労働」であった。「遊働」世界に身心が解放されているときに、私たちは生きていることを実感する。

そうした実感を得るためにも、日本の職人たちは、まずはモノづくりの原料や産地にこだわりを持つ。すなわちそれぞれの国魂と我が職とが適合するか否かを試す。あわせて、心身のコンディションや感性を整え肉体を正確な計器とすべく、宗教的な儀式も行なうのであろう。

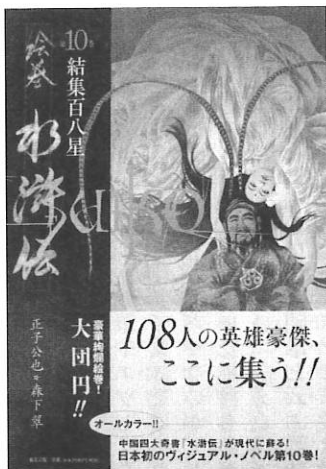
死という、もつとも乱れのない領域に半ば身を浸してこそ、生きたモノを生み出すことができる。自身も本当に生きることが出来る。こうした、生死一如の時空こそが、神域というべきものであったのだと思われる。

正子公也 ☆ 森下 翠

## 絵巻 水滸伝 全10巻堂々完結

壮大なストーリーで送る豪華絢爛絵巻物語、ついに佳境へ突入。  
108人の豪傑がここに集う!!

B5判 上製  
1~5巻 各2625円(税込)  
6~10巻 各3675円(税込)



発行 魁星出版 発売 學燈社

お問い合わせは  
〒169-8608 東京都新宿区西早稲田3-5-10  
03(5228)7154 <http://www.gakutousya.co.jp/>

## 写真で読む 世界の戦後60年

B5判変型 256頁 定価3800円(税別)

オールカラー



写真家集団〈マグナム〉の写真家たちが、戦後60年にわたって撮り続けた膨大な写真群の中から300点余りを厳選。写真と文章で戦後史を俯瞰する。

発行 魁星出版 発売 學燈社

お問い合わせは  
〒169-8608 東京都新宿区西早稲田3-5-10  
03(5228)7154 <http://www.gakutousya.co.jp/>